

まちを面白くする

特集

文化を担う人

魅力があるまちには素晴らしい文化があります。今回の特集では、そんなまちづくりに欠かせない、文化や芸術を担う人々について紹介します。明日の佐世保を面白くする皆さんの活動に、ぜひ注目してください。

アルカス演劇さーくる×劇団楽園天国
「カンカン山んにき」公演前リハーサル
@アルカスSASEBO

宮地区に残る「無窮洞」は、太平洋戦争中に当時の宮村国民学校の教師と小学生たちが掘った巨大な防空壕で、工事は昭和18（1943）年から終戦まで続けられました。

この無窮洞と佐世保空襲を題材にした舞台「カンカン山んにき」が6月27日（土）から4日間、アルカスSASEBOで上演され好評を得ました。戦時下を生きた大人と子どもたちを描いた本作には、地元を拠点とする「劇団楽園天国」を中心とした「アルカス演劇さーくる」の皆さんが出演。今回は、最終リハーサルに伺い、演出を担当し

た柴田静香さんに話を聞きました。

「早岐中演劇部の子どもたちも多く出演してくれたんですが、それぞれ忙しい中で頑張ってくれたと思います。子どもたちには登場人物がどんな心情なのかを説明して、その気持ちを持ってもらうことに力を入れました。舞台ではみんなの活発なところや純粋さがよく表現できていたので、それが良かったです」

地元劇団にできること

「カンカン山んにき」のほかにも、同劇団では佐世保ジャズ黎明期を題材にした「みなとま

ちさんせつ」となど、佐世保を舞台にした演劇を作り続けています。

「佐世保ならではの題材は、地元にいる自分たちにはか芝居にできない。市民に共感してもらえない芝居を作ること、それが地元劇団の一番の強みだと思っています。友人に誘われるままに始めた演劇ですが、佐世保でやり続ける意味も少しずつ見つかってきた気がします」

演劇の楽しさを伝えたい

同劇団では、演劇を通じて子どもたちに表現やコミュニケーションの楽しさ、大切さを伝えるワークショップにも力を入れています。

「今回出演してくれた子どもたちも、ワークショップに来て

くれて以来の付き合いです。小学生のときに教えた子が高校生になっても来てくれるなど、つながりはどんどん増えています。コミュニケーションを学ぶいい方法なので、皆さんにも気軽に参加してほしいです」

次回の公演に向けて

「この秋の文化ウィークでは、アルカス演劇さーくと無窮洞をテーマにしたワークショップを開催します。夏休みに子どもたちと実際に無窮洞を見に行くと、感じたものを表現していると思うと思います。来年6月には、参加した子どもたちも加えて「カンカン山んにき」を再演する予定です。いろんな世代の人に見てもらいたいですね」

取材日 6月27日、30日



劇団楽園天国
柴田静香さん



「カンカン山んにき」は平成16年の初演から繰り返し上演されています。今回は特に大人たちに焦点を当てた演出となっていました。子どもたちの熱演も光っていました。



(写真左)店内では無料のライブも行われ、観光客も多く訪れる(写真右)ギタリストの前田和隆さん。クルーズ客船の歓送行事で演奏するなど、本市の観光振興にも協力していただいています



佐世保JAZZ実行委員会
山下ひかるさん



佐世保ジャズ文化の立役者、山下ひかるさん @JAZZ SPOT いーぜる

ことしの秋で25回目を迎える「佐世保JAZZ」。日本一長く続くと言われているこのジャズフェスを第1回から中心となって運営してきたのが、「いーぜる」の山下ひかるさんです。

音楽仲間との活動

「いーぜる」をオープンしたのが昭和47年、22歳のときです。外国人バーが次々と消え、造船業も低迷していて、佐世保の街が縮小しているような時期でした。佐世保にジャズの歴史があるなんて知られていなかったし、ジャズミュージシャンはほとんどいない状況でした。

開店して1年後には大赤字になって、店を仲間に入れて出稼ぎに行ったこともありました。10年程経ったころに、ロックもフォークも下火になって、お客さんも減っていたんです。何とかしなければ、と仲間呼び掛けてアマチュア音楽家の団体を立ち上げました。ジャズ、ロック、プラスチックバンドなどジャ

が沈むのが見えるんです。自衛隊の船もライトアップしてくれて、きれいでした。

佐世保ジャズの歴史を調査

「サンセット99ライブを立ち上げたころ、ある人から「山下さんの活動は、ジャズが盛んだった佐世保の歴史にかなっている」と言われたことがきっかけで、当時の関係者に聞き取り調査をやって、昭和26年〜30年ごろには200人以上のプロのジャズミュージシャンが全国から佐世保に集まっていたことが分かったんです。その当時は朝鮮戦争でたくさんの米軍関係者が佐世保にいたので、彼ら相手にダンスホールやクラブで演奏していたんですね。佐世保は戦後にジャズ文化が開いた街だと分かってからは、自分たちの活動を説明しやすくなりました」

サンセット99ライブはその後も年に1回開催し、第12回からはハウステンボスに、第21回からはアルカサSASEBO

ンルを超えたメンバーで、年長者だった僕が代表。「コミュニティセンターや公園で数百人規模のコンサートをやっていんですが、活動を通じて市の文化事業にも関わることができました」

サンセット99ライブを開催「20歳のときに体験したジャズの野外コンサートに憧れて、いい演奏を自由な雰囲気の中で、そんなイベントを佐世保でやりたいという思いがありました。市の助成も得られて、平成3年に実行委員会の有志と第1回「サンセット99ライブ・サセボ」を千原公園で開催しました。ステージも仲間の手作りで、会場からは赤崎山に夕日

に会場を変更。名称も「佐世保JAZZ」と改めました。

「私たちは市民でやる。だから難しい面はあったけど、スポンサーに左右されずに続けることができました。1人では始められなかった。活動の中でいろんな人たちとつながったことが、実現化の大きな力になったと思います。あと、佐世保は人が優しく。僕はよそ者だけど、みんな受け入れてくれましたから。これからも自由な精神、雰囲気は残していきたいですね」

今ではジャズの演奏家や演奏の機会は各段に増え、佐世保に再びジャズの音が鳴り響いています。

「お客さんが演奏を楽しんでいるのを見るのは嬉しいですね。ジャズの魅力はアドリブ(即興演奏と、スイング)ジャズ特有のリズム。皆さんにもリラックスして聴いてもらいたいと思います」

取材日 6月18日、19日

文化イベント公演情報

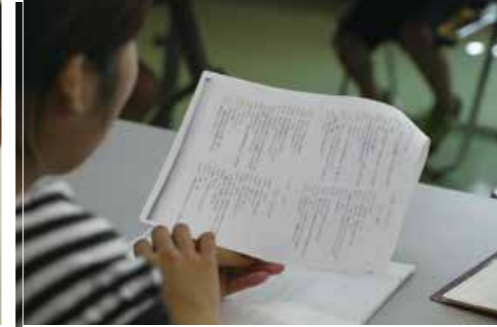
佐世保JAZZ 2015

佐世保JAZZ at アルカスSASEBO 2015

時 10月11日@15時～21時予定
場 アルカスSASEBO・大ホール
料 全席自由 大人4,000円、学生1,500円
※当日券は500円増し。

佐世保JAZZ2015 サテライトライブ

時 9月9日@～10月予定
場 ハウステンボス、させぼ五番街 ほか
SASEBOナイトライブ
時 9月中旬～10月初旬の土・日曜
場 市内各所のライブハウスなど
※文化ウィーク中にもジャズのセミナーやライブを企画しています。



ワークショップにはさまざまな年代の人が参加。和やかな雰囲気の中、参加者はそれぞれの役を演じる稽古に励みました。

アルカス演劇さーくる×劇団楽園天国

文化ウィーク「えんげきたいけん」

無窮洞について知ったこと、感じたことを体で表現する、小学生を対象としたワークショップを開催。最終日には発表もあります。

時 10月30日@～11月1日@
※9月から募集予定。
場 アルカスSASEBO
劇団楽園天国フェイスブックページ
<https://www.facebook.com/rakuentengoku>

劇団HIT!STAGE

文化ウィーク公演「血の家」

福岡市の劇団「+14(プラスフォーティーン)」との合同公演です。父の訃報を聞き佐世保に戻った長女と17年ぶりにそろう姉妹。父の死と向き合う彼女たちの葛藤と再出発を描く物語です。日本劇作家協会「第19回新人戯曲賞」優秀賞受賞作品。

時 10月31日@、11月1日@
場 アルカスSASEBO
劇団HIT!STAGEホームページ

<http://www.geocities.jp/hitstage0402/hitstage.html>

佐世保JAZZ、第4回させぼ文化ウィーク(本年度から「させぼ文化マンス」として開催予定)の詳細は次号以降に本紙でお知らせします。

問い合わせ 文化振興課 ☎24-1111

としても誇らしかったですね。『血の家』というタイトルで誤解されがちですが大丈夫です。佐世保を舞台にした、楽しい佐世保弁のお芝居なので、地元の方にもぜひ観に来てほしいと思います。」

ワークショップでの活動
ことしからは文化ウィークの一環で、演劇のワークショップ、「させぼのものがたり」プロジェクトも始めました。ワークショップ自体は何年もやってるんですけど、もう少し芝居作りを理解してもらおう、という内容も加えていきます。担い手、人材を育てたいという目的があるんですが、演劇を楽しみたい人、担い手を目指す人、それぞれの段階で参加できるようにやっていきたいと思っています。」

代表の田原さんも「ワークショップでいろんな人と関わること、私たちもそれまでになかった引き出しを多く持っているようになりました」と話します。

活躍の場は市外へ
夏と秋には東京での公演を

予定するなど、市外で活動したり、演劇人と交流する機会も増え、メンバーそれぞれが役者や劇作家、演出家として活躍の場を広げています。

「お客さんに喜んでもらうことこそ芝居なので、ちょっとでも良かった、とか面白かった、と言ってもらえることがありがたいです」と話す田原さん。今では演劇がない人生は考えられない、と話すが皆さんの今後の活躍が期待されます。

取材日 6月26日、27日

劇団HIT!STAGE @「させぼのものがたり」プロジェクトワークショップ

「劇団HIT!STAGE」は平成9年に結成。佐世保を拠点に、福岡や東京でも公演を行うなど精力的に活動しています。立ち上げから現在までのことを副代表で脚本担当の森馨由(かほ)さんに聞きました。

「田原(佐知子)さん、代表・演出(と)は中学と高校の同級生で、中学生のときに彼女の芝居を見て、演劇ってすごいと思ったのが始まりでした。ほかのメンバーは芝居に馴染みがなかったのですが、演技も台本も基本的に田原の指導でやってきましたね」

地元を題材にした舞台

「アルカス演劇さーくる」に参加していたときに、劇作家の岩松(いわの)さんから指導を受けたんです。そのときに『佐世保を題材にした芝居を書いてみたら』と言われて書き始めたのが10年前でした」

このときの作品『春の鯨』は野球部のマネージャー2人が高校卒業から10年後に再会し

て始まる物語で、日本劇作家協会新人戯曲賞の優秀賞を受賞しました。以降も、故郷・佐世保とそこに暮らす人々を題材にした作品を次々と発表。HIT!STAGEの作品は全国で数々の戯曲賞を受賞したほか、各地で上演され高い評価を受けています。

「それ以前はもう解散しようかと思っていたんですが、最後に頑張ってみろ、と言われて作った『春の鯨』で賞ももらったからは180度変わりました。県外からも声が掛かるようになって、それまでは狭かった活動の幅が一気に広



劇団HIT!STAGE (左から)真島久美さん、森馨由さん、田原佐知子さん、森貴子さん

がった感じでした」

舞台「血の家」公演

「私たちの芝居は佐世保を舞台にした家族の話が多いです。台詞(せりふ)はほとんど佐世保弁。ここの『文化ウィーク』で上演する『血の家』は、福岡の劇団との合同公演です。昨年は福岡のほかに韓国でも上演したんですが、お客さんが字幕を見ながら笑ったり泣いたりしてくれて、思った以上に好評でした。福岡の役者さんも懸命に佐世保弁を覚えてくれましたし、佐世保弁の芝居が韓国で上演されるのは、私たち